

(9 月 29 日)「詩編 108 : 1～7」

あなたの愛する人々が助け出されるように 右の御手でお救いください。それを我らへの答えとしてください。

(詩編 108 編 7 節)

・「託宣に基づく救いの確信」: 救いを求める共同体の祈りです。この詩編 108 編の 2 節から 6 節は詩編 57 編 8～12 節と、また 7 節から 14 節は詩編 60 編 7～14 節とほぼ似た内容となっています。

・2 節に「わたしは賛美の歌をうたいます」とあるように、最初に出てくるのは個人の賛歌です。しかしその個人的な祈りが共同体を代表した、共同体のための祈りと変わっていくのです。

・わたしたちが用いている聖歌集には、共同体の歌が多く載せられています。その反面、以前使っていた古今和歌集にあった個人的な信仰の歌が減ったようにも思います。個人の祈りが基本にあることを思うと、そのような聖歌も大切にしたいと思います。

(9 月 30 日)「詩編 108 : 8～14」

包囲された町に 誰がわたしを導いてくれるのか。エドムに、誰がわたしを先導してくれるのか。

(詩編 108 編 11 節)

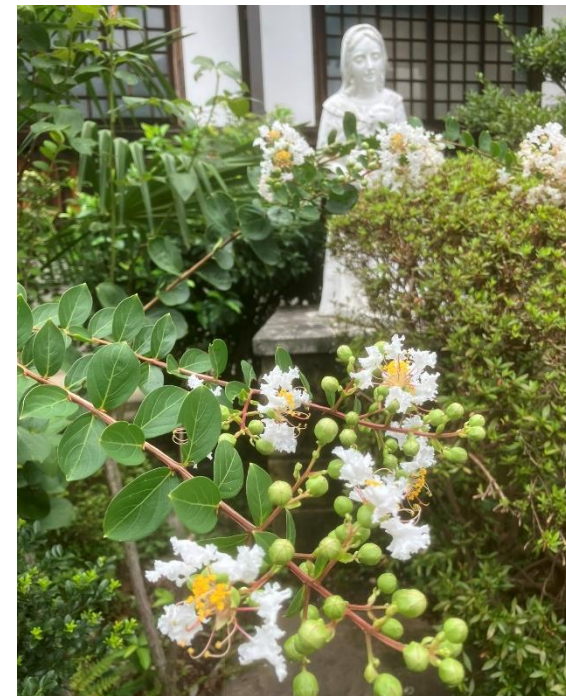
・シケムやスコト、ギレアドはダビデ王のころ、イスラエルの支配下にありました。またマナセやエフライム、ユダも地名ですが、もともとはヤコブの子や孫の名前で、それぞれの民族に与えられた地でした。

・さらにモアブやエドムやペリシテは、旧約聖書の中ではイスラエル民族に敵対する者として描かれています。どうしてもこのような地名や民族が書かれると、わたしたちは違う感情を持ってこの詩編を読んでしまいがちです。

・この詩編は「敵を滅ぼす」という視点ではなく、ただ神さまのみがこの世界を支配されるのにふさわしいお方だということを賛美していると捉えたほうがよさそうです。聖書の時代の「敵」という考え方は、イエス様によって否定されたのですから。

詩 編 通 読

9 月



(9月 1日)「詩編 100 編」

感謝の歌をうたって主の門に進み 賛美の歌をうたって主の庭に入れ。感謝をささげ、御名をたたえよ。

(詩編 100 編 4 節)

- ・「全地の民よ、主をたたえよ」：賛歌です。この詩編 100 編は、朝の礼拝（祈り）でも用いられます。解説によれば、この詩編は「礼拝を引き起こす」ものということです。「感謝のために」という表題も、礼拝を思い起こさせます。
- ・この詩編を元にした聖歌は大変多く、3 番、21 番、200 番、305 番、314 番、318 番、324 番、333 番がそれにあたります。さらにそのうちの 5 曲が、「賛美と感謝」というカテゴリーに含まれます。
- ・2 節と 4 節では、「御前に進み出よ」、「主の門に進み」、「主の庭に入れ」と、神さまの前に出るように促します。わたしたちの礼拝でも、神さまの前に心を開くことが大切です。そして一緒に、神さまのみ名をたたえるのです。

(9月 2日)「詩編 101 編」

朝ごとに、わたしはこの地の逆らう者を滅ぼし 悪を行う者をことごとく、主の都から断ちます。

(詩編 101 編 8 節)

- ・「若き王の決心」：王の詩編です。エルサレム王の即位式のときに歌われたものと言われています。またマルティン・ルターはこの詩編を、「ダビデの君主鏡」と呼んでいたそうです。
- ・この詩は三部に分かれています。まず 1～4 節では王としての生活の基準を語ります。王が理想とすべき、正しい振る舞いを遂行することを宣言するのです。王自身が清廉潔白であることを、民の前で宣言するのです。
- ・そして 5～7 節では王が臣下を統制する基準について、さらに 8 節では王が国全体を治める基準について語ります。当時宮廷では、「朝ごとに」裁判がおこなわれていました。日々国を治めるために何をすべきか、王の決意がここに書かれているのです。

(9月 27日)「詩編 107 : 33～38」

主が祝福されたので彼らは限りなく増え 家畜も減らされることはなかった。
(詩編 107 編 38 節)

- ・この詩編 107 編は、礼拝で用いられてきました。ここからは、神さまの驚くべきみ業が語られていきます。「人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる（8、15、21、31 節）」神さまに、感謝をささげているのです。
- ・聖歌 318 番「いざやともに」は、この詩編 107 編を歌にしたものだと考えられています。（聖歌集の聖句索引には、なぜか入られていませんが）。「いざやともに 声うち上げて くしきみわざ たたえて歌わん」。
- ・「造りましし 天地（あめつち）みな 神によりて 喜びあり」。つい口ずさんでしまいそうな、軽快なメロディーです。「主が祝福された」喜びを、わたしたちも礼拝の中で分かち合っていけたらと思います。

(9月 28日)「詩編 107 : 39～43」

知恵ある人は皆、これらのことを心に納め 主の慈しみに目を注ぐがよい。
(詩編 107 編 43 節)

- ・わたしたちは礼拝の中で 神さまを賛美します。それはわたしたちが神さまによって生かされている喜びを知っているからです。この詩編の中では、「飢えと渇きで衰え果てている人」、「捕らわれた人」、「死の門に近づいた人」、「海の荒波の中にいる人」を覚えます。
- ・わたしたちはその人たちのために祈るとともに、自分がそのような状態になっていることも覚えて祈ります。誰かのために祈ることは、誰かから祈られていることも意味しているのです。
- ・聖歌 2 番「風に目をさまして」の 2 節に、このような言葉があります。「風に向きあうとき聞こえてくる ささやきと叫び 試みにもがく中に 共に立つ仲間を知る 長い夜にも朝は訪れる 希望とともに朝は訪れる」。わたしたちは決して一人ではありません。

(9月 25日)「詩編 107:10～21」

彼らは、闇と死の陰に座る者 貧苦と鉄の枷が締めつける捕われ人となった。
(詩編 107 編 10 節)

- ・今日の箇所では、二つのグループの人たちを覚えてお祈りしています。一つは捕らわれた人たちについて(10～16 節)、もう一つは死の門に近づいている人たちについて(17～21 節)です。
- ・昨日の箇所から、同じ言葉が続いていることに気づかされます。「苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと 主は彼らの苦しみにも救いを与えられた。(6、13、19 節)」と、「主に感謝せよ。主は慈しみ深く 人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる。(8、15、21 節)」です。
- ・聖公会の礼拝においても、代祷のときには司式者の呼びかけに対して、会衆が同じ言葉を繰り返す場面が出てきます。その際に大切なことは、機械的ではなく心を込めて唱えることです。一つ一つの言葉を大切にしましょう。

(9月 26日)「詩編 107:22～32」

主は嵐に働きかけて沈黙させられたので 波はおさまった。
(詩編 107 編 29 節)

- ・今日の 23～32 節では、海の荒波の中にいる人たちのために歌います。日本聖公会では 7 月の一つの日曜日を「海の主日」と定め、祈っています。この主日には、ミッション・ツー・シーフェローズの働きを覚えています。
- ・わたしたちの暮らしを守るために厳しい環境で働く船員たちを思い、支援を続けられるよう心をつにしていけるのです。聖歌 342 番は、そのような海で働く人たちを覚えて歌う聖歌です。
- ・「とこしえの父は荒波を治め 大海の境 深みに定める 海路行く人を支えてください」。海だけではなく、様々なインフラ設備で働く方々を覚え、お祈りしていくことが出来ればと思います。

(9月 3日)「詩編 102:1～12」

打ちひしがれた心は、草のように乾く。わたしはパンを食べることすら忘れた。
(詩編 102 編 5 節)

- ・「復興のための祈り」: 7 つある悔い改めの祈りの 5 つ目です。表題に【祈り。心挫けて、主の御前に思いを注ぎ出す貧しい人の詩。】とあります。この独特の表現は何を意味しているのでしょうか。
- ・この詩には、苦しみが多く描かれています。当時、人が嘆きの中にあるときには、頭から灰をかぶるという慣習がありました。10 節の「パンに代えて灰を食べ」という表現は、頭から落ちた灰が食事にも入っている様子を指しているのかもしれません。
- ・神さまが拒絶をされている中で、わたしたちは何に希望を見出せばよいのでしょうか。「食事が喉を通らない」ほど、悲しみ、暗闇の中に落とされたときに、わたしたちは何にすがりつければよいのでしょうか。

(9月 4日)「詩編 102:13～23」

後の世代のために このことは書き記されねばならない。「主を賛美するために民は創造された。」
(詩編 102 編 19 節)

- ・この詩編は、シオンを再建される主を賛美するものです。しかしこの詩の 20～23 節が、ある聖歌に用いられています。その聖歌は 422 番、「長崎の空は 足もとからはじまっている」です。
- ・2006 年に発行された日本聖公会聖歌集には、広島(421 番)、長崎、沖縄(423 番)の歌が収められています。ご存じのようにこの 3 つの地に共通していることは、戦争により深い傷を負った場所だということです。
- ・「長崎の空は 神の国へいざなっている」と 3 節で歌います。神さまはすべてを喪失した者の祈りを顧み、「新しい時を求めながら 天と地を結ぶイエスに ここで出会うため」にわたしたちを導いてくださるのです。

(9月 5日)「詩編 102 : 24～29」

わたしは言った。「わたしの神よ、生涯の半ばで わたしを取り去らないでください。あなたの歳月は代々に続くのです。」
(詩編 102 編 25 節)

・今年には戦後 80 年にあたり、6 月や 8 月には各地で祈りのときがもたれてきました。また戦争に限らず、阪神淡路大震災や東日本大震災、能登の大地震など、わたしたちの大切なものが一瞬にして取り去られることがなんと多いことでしょう。

・また世界に目を向けても、軍事衝突や大規模な自然災害によって住まいを失い、明日を生きる意欲を失っている人も多くいます。わたしたちの叫びは、神さまの耳に聞こえているのでしょうか。

・この詩編 102 編は、心挫けて、主の御前に思いを注ぎ出す貧しい人の詩です。わたしたちの祈りの大半は、もしかするとそのような祈りなのかもしれません。貧しいからこそ、主に寄り頼むしかない。そこに希望を持つしかない。そんなわたしたちなのです。

(9月 6日)「詩編 103 : 1～5」

わたしの魂よ、主をたたえよ。主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。
(詩編 103 編 2 節)

・「神の大いなる愛をたたえよ」：個人的な感謝の詩です。聖歌 566 番「わが心 たたえよ主を」という歌があります。この曲の左下に、para. of Psalm 103:1-2 と書かれています。詩編 103 編 1～2 節を元に詩にしたということです。

・さらに、「テゼ コミュニティー」とも書かれています。これはテゼ共同体という、キリスト教のエキュメニカルな（教派を超えた）男子の修道会で用いられている歌なのです。「わが心 たたえよ主を いのちの主 聖なる み名」。

・魂の叫びのように、この共同体の礼拝では何度も同じ歌詞を歌い続けます。「Bless the Lord, my soul」、神さまはわたしたちに大いなる愛を注いでくださいます。そのことを思い、わたしたちは魂の底から主をほめたたえるのです。

(9月 23日)「詩編 106 : 44～48」

わたしたちの神、主よ、わたしたちを救い 諸国の中からわたしたちを集めてください。聖なる御名に感謝をささげ あなたを賛美し、ほめたたえさせてください。

(詩編 106 編 47 節)

・昨日の箇所までに挙げられた 8 つの罪の後に、こう書かれます。「主はなお、災いにある彼らを顧み その叫びを聞き 彼らに対する契約を思い起こし 豊かな慈しみに従って思いなおし 彼らをとりにしたすべての者が 彼らを憐れむように計らわれた」。

・罪を犯しても、犯してもなお、憐れまれる神さまの姿。それはわたしたちに対する愛でもあります。この詩編は悔い改めの礼拝で用いられてきました。わたしたちもまた自分の罪を顧み、それでも愛してくださる神さまを受け入れていきたいと思います。

・詩編 90 編から始まった第 4 巻も、この 106 巻で終わりです。48 節の頌栄を聞きながら、わたしたちは神さまが与えて下さっている恵みを感じていきたいと思います。明日の 107 編から、いよいよ最後の第 5 巻に入ります。

(9月 24日)「詩編 107 : 1～9」

主は渴いた魂を飽かせ 飢えた魂を良いもので満たして下さった。

(詩編 107 編 9 節)

・「救われた者の感謝」：主のいつくしみをほめ讃える歌です。1 節の「恵み深い主に感謝せよ 慈しみはとこしえに」という言葉を唱えながら、礼拝でこの詩編を用いていたように考えられています。

・3 節にあるように、礼拝には四方（東西南北）から人が集められました。そこには様々な人がいます。特にこの詩編の中では困難にある人たちを覚えていきます。4～9 節では、飢えと渇きで衰え果てている人たちを覚えていきます。

・誰かのために礼拝でお祈りをする。聖公会では代祷に当たることを、この詩編を用いておこなっています。毎週教会に“集められる”わたしたちも、その祈りを大切にしていきたいものです。

(9月 21日)「詩編 106 : 24~31」

これは代々に、そしてとこしえに **ピネハスの正しい業と見なされるであらう。**
(詩編 106 編 31 節)

・5 番目の罪は、24~27 節にある民数記 14 章の出来事です。エジプトから逃れ、荒れ野で 40 年近くさまよっていたイスラエルの人々は、ようやく約束の地にたどり着きます。しかしそこに住んでいた屈強な人たちを見て、イスラエルの人々は弱音を吐くのです。

・「こんなことならエジプトに引き返した方がましだ」と叫ぶ民に対し神さまは、エフネの子カレブとヌンの子ヨシュア以外は約束の地に入ることはできないと伝えられます。神さまの導きを信じられなかった結果というわけです。

・そして 28~31 節には 6 番目の罪が書かれます。民数記 25 章の物語ですが、シティムに滞在していたとき、イスラエルの民がモアブの娘たちに従って、自分たちの神々であるペオルのバアルに犠牲をささげたというものです。彼らは繰り返し、何度も罪を犯すのです。

(9月 22日)「詩編 106 : 32~43」

彼らはメリバの水のほとりで主を怒らせた。彼らをかばったモーセは不幸を負った。
(詩編 106 編 32 節)

・32~33 節にあるのが、7 番目の罪です。これらは出エジプト記や民数記に書かれていますが、その順番は歴史的なものとは違います。7 番目の罪は出エジプト記 17 : 1~7 および民数記 20 : 1~13 にある「メリバの水」の話です。

・モーセはメリバで水を求める民に対し、岩を打つことによって水を出します。ただそのときに神さまの奇跡を疑ったので、モーセも約束の地に入ることができなくなりました。しかし具体的に何が神さまの癪にさわったのか、よく分かっていませんが。

・そして最後の 8 番目の罪が、34~39 節に書かれます。これは士師記 1~3 章にある、繰り返されるイスラエルの罪です。「主は幾度も彼らを助け出そうとされたが彼らは反抗し、思うままにふるまい自分たちの罪によって墮落した。(43 節)」と書かれている通りです。

(9月 7日)「詩編 103 : 6~10」

主は憐れみ深く、恵みに富み 忍耐強く、慈しみは大きい。

(詩編 103 編 8 節)

・この詩編 103 編には、憐れみと慈しみという言葉が多く出てきます。この言葉は、神さまの性格をあらわしていると言われます。そしてその思いは、「虐げられている人」に向けられています。

・ただわたしたちは、自分が虐げられているかと問われると、「そうではない」と思うのかもしれませんが。昼ドラでお姑さんから意地悪をされるお嫁さんのように、目に見えて虐げられている人は、それほどいないでしょう。

・しかし少し視野を広げてみれば、戦争や紛争、弾圧、あるいは差別などによって抑圧されている人たちがたくさんおられることにも気づかされます。神さまはそれらの人々にも目を向け、憐れみと慈しみを与えておられるのです。

(9月 8日)「詩編 103 : 11~22」

主はわたしたちを どのように造るべきか知っておられた。わたしたちが塵にすぎないことを 御心に留めておられる。

(詩編 103 編 14 節)

・お葬式で用いられることの多い聖歌に、512 番があります。「み使いのたたえ歌は 海 山に満ちあふれ あまつ国のさきわいを 夜も日も絶えずしめす なぐさめの声こそ 旅路行く人の力」。

・この歌は「召命と旅」というカテゴリーに属していて、葬送式のためだけに用いる歌ではありません。しかしこの世の旅路を終え、新たなスタートを迎える人を送り出すときに、み使いが神さまをたたえる声に合わせてわたしたちも歌うことが多いようです。

・わたしたちは塵にすぎない者でありながらも、神さまはわたしたちを憐れみ、慈しんでくださる。人間ははかないものです。しかしそれでも神さまはわたしたちを愛してくださいます。だからわたしたちは、魂を込めて主をたたえるのです。

(9月 9日)「詩編 104 : 1～9」

主は地をその基の上に据えられた。地は、世々限りなく、揺らぐことがない。
(詩編 104 編 5 節)

・「創造主への賛美」：救いを求める祈り、および救いに対する感謝です。この詩編の最初に「わたしの魂よ、主をたたえよ」とあります。これは 103 編にも見られていた言葉で、104 編でも最初と最後に書かれています。

・103 編では、あふれるばかりの神さまの憐れみと慈しみに対してほめたたえました。そしてこの 104 節では、たくさんの生き物が造られ、養われていることに対してほめたたえています。

・この 9 節までの出来事は、古代近東で古くから知られていた神話だそうです。その流れに従って、神さまの働きを描き出しています。わたしたちは被造物の一つとして、神さまの業を賛美するのです。

(9月 10日)「詩編 104 : 10～23」

ぶどう酒は人の心を喜ばせ、油は顔を輝かせ パンは人の心を支える。
(詩編 104 編 15 節)

・神さまはあらゆるものを、この世界に造られました。この詩編ではそれらのものを、驚きをもって回顧しています。野の獣、野ろば、空の鳥、家畜、このとり、野山羊、岩狸、若獅子。当時、これらの動物が身近にいたのでしょう。

・創世記の 1～2 章には、神さまが天地創造をおこなわれた様子が書かれています。神さまは最初の人アダムに動物の名前をつけるように命じられ、また世界の管理も同時に命じられました。

・しかしわたしたち人間は、世界を「支配」してよいものだ勘違いしてきました。自由に搾取、破壊し、取り返しのつかないことを繰り返してきました。もう一度自分たちも、神さまの被造物の一つだということに目を向けたいと思います。

(9月 19日)「詩編 106 : 6～12」

わたしたちは先祖と同じく罪を犯し 不正を行い、主に逆らった。
(詩編 106 編 6 節)

・6 節の言葉は、悔い改めのための礼拝式文に用いられていたと考えられています。これからイスラエルの民の罪の列挙が始まりますが、その罪を過去のものとして自分のものとして背負っていくのです。

・最初に出てくる「罪」は、葦の海の場面で民が反抗した場面です。彼らはモーセに言いました。「我々を連れ出したのは、エジプトに墓がないからですか。荒れ野で死なせるためですか。一体、何をするためにエジプトから導き出したのですか。(出 14 : 11～12)」と。

・神さまには、エジプト軍からイスラエルの人々を助け出す計画がありました。葦の海を二つに分け、イスラエルの人々にその間を通らせようとされていきました。しかし彼らは、神さまの導きを信じるできませんでした。これが第一の罪です。

(9月 20日)「詩編 106 : 13～23」

主は彼らを滅ぼすと言われたが 主に選ばれた人モーセは 破れを担って御前に立ち 彼らを滅ぼそうとする主の怒りをなだめた。
(詩編 106 編 23 節)

・13～23 節には、第 2～4 の罪が列挙されます。13～15 節には、荒れ野で民がつぶやいた場面が書かれています。これは民数記 11 章にある出来事です。その結果神さまは、マナとうずらを民に与えています。

・次の 16～18 節にあるのは、コラとダタンとアビラムがモーセやアロンに対して反逆を起こした物語です。これは民数記 16 章に書かれている出来事です。反逆した人たちは大地にのまれていきます。

・そして 19～23 節の物語は、モーセが不在の間に不安になった人々が、アロンとともに金の子牛をつくってそれを拝んだというもの(出 32 章)です。しかしそれでも神さまに遣わされたモーセは、破れを担って御前に立ち、神さまをなだめるのです。

(9月 17 日)「詩編 105 : 39～45」

それゆえ彼らは主の掟を守り 主の教えに従わなければならない。ハレルヤ。
(詩編 105 編 45 節)

- ・39 節からは、荒れ野で神さまがいかにして養われたかということが書かれています。雲の柱、火の柱によって導かれ、天のパンであるマナやうずらによって満たされ、岩を打って得た水によって渴きをいやしていきました。
- ・創世記 15 章 18～21 節にこうあります。「あなたの子孫にこの土地を与える。エジプトの川から大河ユーフラテスに至るまで、カイン人、ケナズ人、カドモニ人、ヘト人、ペリジ人、レファイム人、アモリ人、カナン人、ギルガシ人、エブス人の土地を与える」。
- ・この“約束”によって、イスラエルの人たちは「頑な」になっているように思います。今の世界の状況が、この「旧約聖書の約束」によって引き起こされているという事実を、わたしたちはどのように受け止めたらいのでしょうか。

(9月 18 日)「詩編 106 : 1～5」

あなたの選ばれた民に対する恵みを見 あなたの国が喜び祝うとき共に喜び祝い あなたの嗣業の民と共に 誇ることができるようにしてください。
(詩編 106 編 5 節)

- ・「イスラエルの忘恩の告白」：ほめ讃えの賛歌です。この詩編 106 編は前の 105 編と相互補完的な内容となっています。105 編が神さまの驚くべきみ業について語っていたのに対し、106 編はそれにもかかわらずイスラエルの民が神さまに背いた様を描きます。
- ・この詩編の中には、強情なイスラエルの民が神さまに逆らった様子が 8 つ挙げられます。人々はその出来事を過去のものとしてしまわないで、自分たちも同じように神さまを裏切っていることを覚え、悔い改めるのです。
- ・わたしたちもこの詩編を通して、ここに出てくるイスラエルの民と同じように神さまに背き、自分の思いを優先させようとしてきたことを思い出しましょう。そして神さまの前に、心を入れ替えることができればと思います。

(9月 11 日)「詩編 104 : 24～30」

主よ、御業はいかにおびただしいことか。あなたはすべてを知恵によって成し遂げられた。地はお造りになったものに満ちている。
(詩編 104 編 24 節)

- ・聖歌 323 番「この世はみな 神の世界」という聖歌があります。この詩編 104 編では、神さまがすべてのものを造られたことを振り返ります。そのときにわたしたちは思い出すのです。「この世はみな 神の世界」なのだと。
- ・「この世はみな 神の世界 天地(あめつち)すべてが 歌い交わす 岩も木々も 空も海も み神のみ業を ほめたたえる」、「この世はみな 神の世界 鳥の音花の香 主をたたえる 朝日夕日 空に映えて み神のみわざを語り告げる」。一番と二番の歌詞です。
- ・すべての恵みは神さまからのものであり、すべての被造物は神さまに依存しています。そしてわたしたち人間も、同じ被造物なのです。岩や木々と共に、鳥や花と一緒に、主をたたえましょう。

(9月 12 日)「詩編 104 : 31～35」

命ある限り、わたしは主に向かって歌い 長らえる限り、わたしの神にほめ歌をうたおう。
(詩編 104 編 33 節)

- ・104 編 30 節まで続いてきた創造主としての神さまの働きを受けて、31 節以降では願いの祈りをささげます。「主の栄光がとこしえに続くように」との願いは、この豊かな世界がずっと続きますようにと聞こえてきます。
- ・さらに作者は、「命ある限り」、「長らえる限り」、神さまにほめ歌をうたうことを誓います。神さまに賛美をささげること、それはわたしたちに与えられた大きな恵みです。食事の前にも寝る前にも、神さまにいつも感謝・賛美をささげたいと思います。
- ・この詩編の最後には、「ハレルヤ」という言葉があります。「ハレル」はほめたたえるということ、そして「ヤ」は「ヤハウェ (神)」のことです。詩編で最初に出てくる「ハレルヤ」の声とともに、神さまを賛美しましょう。

(9月 13日)「詩編 105 : 1~6」

主の僕アブラハムの子孫よ ヤコブの子ら、主に選ばれた人々よ。

(詩編 105 編 6 節)

- ・「イスラエルの不思議な歴史」：ほめ讃えの賛歌です。この詩編 105 編は、イスラエルがどのようにしてつくられたのかが書かれています。6 節にあるように、この詩はアブラハムの子孫である会衆に宛てて書かれています。
- ・簡単に言うと、ここには神さまがどのようにしてアブラハムとの約束を果たされたのかということです。神さまは一方的に、イスラエルの民を選ばれました。その約束をわたしたちは「旧約（古い約束）」と呼びます。
- ・聖公会ではイエス様の十字架によって、新しい約束（新約）が神さまと結ばれたと考えます。しかしユダヤ教や福音主義のキリスト教では、旧約も文字通りに守らなければいけない大切なものだとします。そのため、その約束を巡って争いが続くのです。

(9月 14日)「詩編 105 : 7~11」

宣言された 「わたしはあなたにカナンの地を 嗣業として継がせよう」と。

(詩編 105 編 11 節)

- ・7~11 節には、導入として主題が書かれます。イスラエルの歴史の中で重要なことは、「約束の地」が神さまによって与えられたということです。聖書の中では、そのことが一番強調されています。
- ・しかし昔からカナンに住んでいた人たちにとって、「聖書の神さま」はあくまでも「異教の神」にすぎません。自分たちが信じている神さまが「もっと良い土地をあげよう」と言ってカナンから離れるなら分かりますが、いきなり襲われても困るわけです。
- ・現在パレスチナで暮らす（暮らしてきた）多くの人たちは、「イスラエルの建国」によって聖書の時代のカナンの人々と同じ思いを持ったかもしれません。この聖書の歴史をわたしたちはどう捉えるべきか、考えていきたいと思っています。

(9月 15日)「詩編 105 : 12~15」

「わたしが油を注いだ人々に触れるな わたしの預言者たちに災いをもたらすな」と。

(詩編 105 編 15 節)

- ・ここから詩編は、イスラエルの歴史物語に入っていきます。これまでの神さまの導きを思い起こし、賛美をするのです。イスラエルは元々、とても小さな民族でした。エジプトやアッシリア、ペリシテなどに囲まれて、いつ消滅してもおかしくない群れでした。
- ・しかしその「小さな群れ」に神さまが目を注がれたというのが、旧約聖書の理解です。15 節の「油を注いだ人々」や「預言者」とは、アブラハムとイサクのことです。実際に二人は預言者とは呼ばれていませんでしたが、神さまと親しくしていました。
- ・そして 14 節の「王たち」とは、エジプトの王ファラオやゲラルの王アビメレクのことです。ここに書かれているのは、創世記 12、20、26 章に出てくる物語です。アブラハムたちはさまよいながら、約束の地を目指すのです。

(9月 16日)「詩編 105 : 16~38」

エジプトは恐怖に襲われていたから 彼らが出て行くのを喜んだ。

(詩編 105 編 38 節)

- ・16~38 節に書かれているのは、イスラエルの人たちが最も大切にしている「出エジプト」の出来事です。創世記 37 章から始まるヨセフ物語では、ヤコブの息子ヨセフがエジプトに奴隸として売られます。
- ・聖書はその出来事から、すでに神さまのご計画がスタートしたのだと語ります。カナンを襲った大飢饉によって、イスラエル（ヤコブ）はハムの地（エジプト）に住むようになります。そして時代が流れていきます。
- ・エジプトで奴隸状態になってしまったイスラエルの人々は、モーセとアロンによって、エジプトを脱出します。十の災いによってエジプトの人々を恐怖に陥れ、彼らは再び約束の地を目指すのです。その出来事が、彼らの信仰の拠り所となるのです。